

□

問一

都会の生活と別れ、私にも思い出のある山村に移住した友人をうらやましく思いつつ、移住の経緯が不明でもあり、友人をねたんだり非難したりできないということ。

（解答欄 3 行）

問二

行き先も決めず、季節の風情を全身で思うがままに味わい、それに誘われて歩く、気ままにゆったりとした旅。

（解答欄 2 行）

問三

柿を採る農夫のしぐさや手にした柿の見栄えに、かすかな違和感を抱いたが、いざ柿を勧めらると、農夫の飾り気のない親切心が素直に心に沁み込んだから。

（解答欄 3 行）

問四

旅先で出会った山村では、秋ののどかな時間にだけ優しく高貴な光がふりそそいでおり、それは土地の人には気づかれなくとも、光やその色合いに物語を感じる私には、太陽の秘かで特別な慈愛であるかに感じられたから。

（解答欄 4 行）

問五

慈愛のように光がふりそそぐ山村に魅惑され、村にしばらく留まりその恩恵を享受しようと考えてみたが、旅人の私が留まることは、貧しさや労働の厳しさも含め、自然と調和し自足している暮らしを損なうと感じたから。

（解答欄 4 行）

三

問一

宣長の「古事記伝」が不朽の古典だとしても、それは宣長が生きた時代とそこでの宣長固有の問題意識を反映したものであり、現代人の古事記理解と異なるのは当然だから。

（解答欄 3 行）

問二

予期とその否定の繰り返しから生じる深い読みの創造であるべき作品読解の経験を、専門家は既存の学問の枠内で固定化し客観的に捉えうるかにみなしてしまうこと。

（解答欄 3 行）

問三

時代の推移や人生経験のありようによって異なっていく個々人の作品の読みの変化は、それと類比的に捉えうる、同時代における自他の読みの違いと微妙に関係しながら進行していく時間的過程だとみなしうるといふこと。

（解答欄 4 行）

問四

作品には明示されている内容とそれを支える背後の文脈とが分かちがたく絡まり合っているが、それを弁えないまま、人生の多義的な経験に身勝手に引きつけて作品を読もうとしすぎると、単なる主観的読解に陥ってしまいがちだから。

（解答欄 4 行）

問五

作品読解とは、個々人が自己の生きる時代やそこでの他者との関わりの中で、自己の経験を踏まえ作品と動的に向き合うかたちでなされるものである以上、恣意的読解や硬直した客観的読解に終始するのではなく、歴史において弁証法的に生成発展する経験としてあるべきだといふこと。

（解答欄 5 行）

三

問一

何やかやと運に恵まれず出世できなくて、たいした手柄も立てられず名声も上げられず、

（解答欄 2 行）

問二

ますます、学問して国家有用の人物になりたいという志も痛切に思われなくなった。

（解答欄 2 行）

問三

「暁行」の詩で晁冲之は、田舎の村で一晩中学問に励む若者に、大志を抱いて学問したものの無駄になり、功名を遂げられなかった自分の姿を重ねて、その若者の将来を案じ不憫に思う気持ちを詠んでいるということ。

（解答欄 4 行）

問四

寂しい村に夜明け到着したが、まだ灯火が灯っているのを見て、一晩中学問をしている人がいることがわかった。

（解答欄 2 行）

問五

幼子は、今さらわざわざどうしてこの世に生まれてきているのだろうか。竹の子の節がいくつもあるように、つらいことがたくさんある世の中とは知らないのかなあ。

（解答欄 3 行）